イスタンブル日本人学校における現地理解学習の実践

前イスタンブル日本人学校　教諭
愛知県愛知郡東郷町立春木中学校　教諭　中　野　良　治

キーワード：在外教育施設、イスタンブル、現地校、国際理解、交流学習

１．はじめに

アジアとヨーロッパの間にまたがるボスポラス海峡。その海峡を中心に、大都市イスタンブールの街が広がっている。東ローマ帝国時代、オスマントルコ帝国時代を駆け抜けたイスタンブールは、長い歴史を感じさせる風景を見ることができ、街は新市街と旧市街に分かれている。このような環境の下で、私は貴重な経験をさせていただいた。ここでは、イスタンブル日本人学校での中学部における現地理解学習の様子について紹介したい。

２．現地理解学習の実践

(1) 本校の重点目標

・児童生徒が生活するトルコの歴史、地理、文化、生活習慣に関する知識を増やすよう指導するとともに、異なる文化や価値観を尊重できるように指導を行う。
・現地校との交流を通じて国際理解を深める。
・日本の文化に触れる場を設定し、日本人としての自覚と誇りを持たせる指導を行う。
・発達段階に応じたキャリア教育に繋げられる場とする。

(2) それぞれの学習について

①トルコ子どもの日行事

トルコ共和国では、4月23日が子どもの日として、国民の祝日となっている。トルコ建国の父と称されている、トルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクが制定した。今年でトルコ共和国が設立されて95年を迎えるが、「子どもは国の宝」として、国民全体が子どもを大切にしている様子が、今もなお、日頃の街全体の様子からも伺うことができる。

本校生徒によるソーラン節披露

毎年、子どもの日になると、現地の各学校で行事が開催されている。最近では、治安に配慮し、安全を確保する理由で、学校によっては開催時期を子どもの日から多少前後させる場合もあるようである。それぞれの学年で歌やダンスを披露したり、劇形式でムスタファ・ケマル・アタテュルク氏がどのような歩みでトルコ共和国建国に至ったのかを紹介するなど、日本の学校であれば学習発表会に位置づけられるものである。発達段階に応じて発表内容が異なること、また複数の学校との交流によって、それぞれの現地校がもつ特徴を把握することで、よりよい実践ができると考え、セズィン校と主に交流している。数年前より交流させていただいており、年少より高校までの設備がある私立の一貫校である。

交流では、毎年体育祭で披露しているソーラン節の演舞を発表した。本校中学部の生徒は、法被をまとって、中には少ない練習時間で初めてソーラン節も踊る生徒もいたが、トルコの方々に日本の伝統の一つを披露する貴重な機会となった。

②修学旅行での取り組み

本校では、小学部5年生から中学部までの児童生徒が、毎年6月上旬に修学旅行に行っている。昨年度は、カッパドキア方面への修学旅行を行った。

修学旅行のしおり作成に向けて、3日間の日程をもとに、旅行先の調べ学習を行った。インターネットや旅行のガイドブックを中心に調べ、しおり原稿を作成し、事前学習の資料とした。

修学旅行本番では、事前に学習したイメージと実際に目の当たりにしたイメージと対比させながら、様々な活動に取り組むことができた。

カッパドキアは世界的に有名な観光地である。単なる旅行にならず学習の側面も大切にできるよう、遺跡での発掘作業を体験した。また、カッパドキア地方は陶器に最適な土がとれる地域でもあり、陶芸も産業の一つとなっているため、陶芸体験も行い、旅行後に、自分たちが作成した陶器を送付していただいた。

③パノラマ歴史博物館見学

1453年の5月にオスマン帝国のメフメット2世によって、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）が陥落された。その時の戦いの様子を細かく知ることのできる博物館である。トルコで生活しているからこそ、現地の過去に起こった歴史を学ぶことを目的に、10月下旬にパノラマ歴史博物館を訪問した。

館内には、この時代に起こった出来事についてのパネルが展示されており、また展望室は戦いの様子を一望できる施設もあり、壮大な戦いが繰り広げられたことが容易に想像することができた。

④アタテュルク氏の命日追悼

1938年11月10日の午前9時05分、トルコ建国の父と称されるムスタファ・ケマル・アタテュルク氏は、イスタンブールのドルマバフチェ宮殿にて執務中に永遠の眠りについた。毎年、11月10日の午前9時05分には、トルコ国民はアタテュルク氏への哀悼の意を表して、黙祷を捧げている。その時刻になると、街にはサイレンが鳴り、道路を走る車はその場で停止し、アタテュルク氏が眠っているアンカラのアタテュルク廟、またはドルマバフチェ宮殿の方向を見て黙祷を捧げる。その時間が過ぎると再び、普段の生活に戻る。

私たちはトルコで住まわせていただいている。その状況を目の当たりにして、現地でのアタテュルク氏を称える気持ちを実感することができるよう、その時刻になると学校近隣の道路に並び、哀悼の意を捧げている。

⑤セズィン校訪問

毎年、中学部が交流させていただいている私立の一貫校である。今年度も11月15日に訪問した。

交流に行く前に、それぞれの学校で自己紹介カードを作成した。事前に交換して互いの顔を知った状態で交流に臨むことにした。また、事前に交流するペアを決めておき、セズィン校の担当の生徒が案内してくれることになった。

セズィン校生徒による合唱

交流当日は、まず英語の授業に参加させていただいた。様々な有名人に関する質問に答えていく授業であった。昼食後は、体育館にてヤカントップ（トルコのドッジボール）を教えてもらいながら交流した。そして音楽の授業にも参加させていただいた。ここで互いに練習してきたものを発表した。セズィン校の生徒は、映画「千と千尋の神隠し」の主題歌にもなった「いつも何度でも」を日本語で合唱した。また日本人学校中学部の生徒は、リコーダーで練習してきたトルコ国歌を披露した。互いに相手の国に関する演目を発表することができた。

⑥現地大学生来校

本校では、近隣のボアジチ大学の学生に来校していただき、英語の授業などの交流事業を行っている。11月下旬に進路学習の一環として、大学卒業を間近に控えた現地の大学生の話を聞き、将来の目標や、大学でどの

ような勉強をしているのかを聞いた。企業の方に来ていただく職業講話を比較すると、自分たちの立場に少し近い先輩方が考えていることを知るための貴重な機会となった。

⑦セズィン校生徒来校

11月の交流では、こちらからセズィン校に赴いて交流させていただいた。2月下旬の交流では、日本人学校に招いて、日本文化の体験を通して交流を行った。

まずは書道を体験してもらった。すずりや文鎮など、書道で扱う道具の準備から共に行い、中学部の生徒達が考えた簡単な熟語やあいさつの言葉を使って、練習した。また後半では、和太鼓体験を行った。ボスポラス学習発表会にて披露した演目の1部を共に演奏できるよう、練習に取り組みながら交流を図った。セズィン校の生徒や先生は、日本文化に触れられたこともさることながら、片付けや清掃に取り組む姿からも、日本の風習を学んでいたようだった。

⑧日本文化体験

イスタンブールには、ボスポラス海峡沿いに茶室を備えた日本庭園がある。日本から遠く離れて生活しているからこそ、日本文化に触れることを大切にすることを目的に、茶室にて、茶道の学習と琴の演奏体験を行った。講師は、イスタンブールに在住されている日本人の先生に依頼した。初めての体験に戸惑いながらも、興味深く取り組む姿が見られた。

3．さいごに

現地での体験、現在のトルコに関する調べ学習、過去のトルコに関する調べ学習、将来に向けて視野を広げていくための現地での体験など、成長段階に応じた学習に取り組むことが出来たのではないかと考えられる。

今後も、私としてはトルコで生活させていただいていた感謝の気持ちを忘れることなく、トルコのよい部分を少しでも広められるよう努めていきたい。